



一方バヌアツはLDCの中では、モルジブに次いで外国人ツーリストが多い国である。欧州の人が好むリゾート施設と雰囲気整っており、ツーリズムでは安定した外貨収入を得ることができている。しかし、貿易赤字が続いており、その赤字をツーリズム産業で補填しているというのが現状である。筆者はこの様な状態は健全な成長ではなく、またバヌアツを訪れるツーリストをオセアニア2ヶ国に依存している状態では、今後ツーリズムがGNPを押し上げることは難しいと予想している。

第3章「貧困問題と国際協力」では、ツーリズム開発を確実に貧困削減につなげるためには、援助機関の関与が必要であると述べている。本書では民間旅行会社Tropic社が、エクアドルの先住民文化体験ツアーに対して行っている支援を事例に、コミュニティと大手ツーリズム企業とのパートナーシップが、貧困削減のためのツーリズム開発にとって最も重要だとしている。そして、この際に生じる両者間の不信感や理解不足を援助機関が間に入り、克服することが必要であると述べている。

対象地域のエクアドルのアマゾン源流地帯では、先住民コミュニティによるツーリズムビジネスが90年代に入ってから開始されたが、その多くがマーケティング・スキルの不足などが原因で失敗していた。一方でTropic社は、先住民の文化とライフスタイルを経験する少人数向けの高額ツアーを販売・運営したいと考えていた。そこでTropic社は現地の人々に研修を実施し、ツーリストのための宿泊施設建設を支援することで、コミュニティに雇用を生み出し、コミュニティの能力形成を行い、ネガティブな影響を抑える

ことでコミュニティと合意していた。そしてツーリズム開発がもたらした収入は村の子供たちの教育や、村人の健康ケアのためにつかわれ、コミュニティの生計活動にはほとんど影響を与えていないことは、興味深いことだと筆者は述べている。

第4章「プロプアー・ツーリズム（貧しい人々に利益をもたらすツーリズム）」では、オータナティブ・ツーリズムとプロプアー・ツーリズム（Pro-Poor Tourism）との違いを見ることで、まだ定義がはっきりしていないプロプアー・ツーリズムに大枠の定義を与えている。とりあえず現在の段階では「貧しい人々への利益を増大するツーリズム・セクターはすべてプロプアー・ツーリズムである」とし、ネパールのフムラ地区を事例に、プロプアー・ツーリズム開発の実態を考察している。

ネパール政府は貧困の削減をツーリズム開発のための重要セクターとしている。本章で事例にあがっているフムラ地区は、ネパールの中でも下から4番目の開発度である。インフラの不足、寒冷の山岳気候などからまだまだツーリストは少ない。そこでオランダ開発機構（SNV）によるサステイナブル・ツーリズム・プロジェクトとして、フムラ地区の水力発電施設、橋、道路などを整備した。そして民間セクターと住民に対して調査を行い、ツーリズム開発に対する考えや住民の貧困実態の詳細を把握した上での開発援助を行ってきた。フムラ地区におけるSNVの活動に対する評価は分かれおり、そもそもフムラ地区のような極端に遠隔の地の開発に、ツーリズムを使ったことは妥当だったのかという疑問がある。ツーリズムによってフムラの人々が得た収入は、フムラ地区では手に入らない米、

日用品などの購入に使われ、フムラ地区にとどまることがないというリーケージ問題を生み出すことになったという報告がある。一方で筆者もいくつかの問題点をあげているが、SNV が住民の貧困実態を明らかにし、住民が開発の主体となるようにその支援者に NGO を指名した点などを正しかったと評価している。そして筆者はフムラ地区の事例から、コミュニティ・ツーリズムの手法によるプロプアー・ツーリズム開発が大きな有効性を持つと述べ、次章に続いている。

第5章「貧困削減とコミュニティ・ツーリズム」では、タイのクロン・クワン村を事例に、プロプアー・ツーリズム開発にとってのコミュニティ・ツーリズムの手法の有効性を考察している。クロン・クワン村では、村長を中心に、地元の僧侶、教師、ボランティアの人々がツーリズム開発の計画を行っている。コミュニティ・ツーリズムの開発には、コミュニティ住民の参加が前提であるが、それを実行することは難しいとされている。しかし、クロン・クワン村では非常にユニークな方法で、コミュニティ住民が開発に参加している。それは開発関係者の家族などがツアーリストとして村を訪れるというもので、このことによりツーリズムに関係する様々なことを直接体験し、村のインフラをツアーリストの立場から評価してもらうことができるのである。現在、クロン・クワン村のコミュニティ・ツーリズム開発は順調な滑り出しを見せ、女性グループを中心に住民の活動が盛んに行われている。しかし住民達はツーリズムからの収入にあまり大きな期待をしておらず、生計の基本を従来どおり農業に依拠していることで、開発のリスクを少なくし、

サステイナブルな成長が期待できると筆者は述べている。

最後の「むすび」では、コミュニティ・ベースでのプロプアー・ツーリズムの具体的なモデルとなり得る事例として、京都府美山町をはじめとする日本各地の観光まちづくりの成功例をあげている。途上国と日本ではインフラ整備のレベルに大きな差があり、ツーリズム開発における専門的知識にも差がある。しかし、日本の成功例にプロプアー・ツーリズムへの手掛かりがあるのではないかと筆者は述べている。

本書では上記にあげた地域以外にも、いくつかの地域を採り上げてツーリズム開発の実態を紹介し、プロプアー・ツーリズムの可能性を考察している。現在、世界中では年間7億人の国際ツアーリストが存在し、彼らによってもたらされる各国への旅行収入総額はおよそ5000億ドルである。これだけの大きなヒット、カネの流れは貧困克服を可能にするだけの十分条件を備えている。しかしその可能性を実現することは難しく、その上一時的な貧困克服ではなく、サステイナブルな開発でなければプロプアー・ツーリズムとは呼べないのである。本書でのいくつかの事例は、数年前もしくは現在進行中のツーリズム開発に関するものが多く、サステイナブルな開発であるか否かはまだまだ判断できない状態である。そして筆者自身も述べているように、コミュニティ・ツーリズムと貧困削減についての研究は始まったばかりで、今後様々な学問分野での研究により、プロプアー・ツーリズムの可能性がより明確なかたちで提案されることが期待される。

(立命館大学・院 北川裕理 記)